

その微笑の中に

阿部光子



その微笑の中



その微笑の中に
ほほえみ なか

一九九二年五月一〇日発行

著者 阿部光子
あべみつこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（営業部） 03—3266—5111

（編集部） 03—3266—5411

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社



© Mitsuko Abe 1992,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-325205-7 C0093

目次

ひとつの樹かげ 5

春よみがえる 49

その微笑の中に 95

土に返る 131

装
画

上
村
松
篁

その微笑の中に

ひとつの樹かげ

夕陽がさすと、自分たちの影がひよろ長くなる、のっぽ、のっぽと互いに、はやし合いながら、帰りを急ぐわたしたちの手には、半ば涸れた野の花の束があった。わたしが生れ育った東京の麻布にも、六十年前には、泥んこになって遊べる原っぱがあった。当時の大倉邸、今のホテルオークラの前あたりには、お化けが原とよばれて、決して家の建たない一劃もあった。こんな昔ばなしを、ぽつぽつと書いておきたいと思うようになったのは、このごろの伝記文学を読んでいると、麻布は高級住宅地で、氣どった人々が行きかっていたように書かれているからである。麻布にも三軒長屋はあったし、わたしの通った麻布小学校の級友には、今なら生活保護を受ける資格のある家庭の人が何人かいた。

下町の生粋の江戸っ子は、麻布もふくめた山の山人種をおくに者とよび、田舎から出て来て東京に住みついた人間で、いざというときは、たとえば大震災などがあれば、せっせと郷里へ帰ってしまう頼みにならない人種だといっていた。山の手の田舎っぺを略して、

のかつぱともいった。そういえば、言葉にも幽かに、なまりがあった。当時、わたしの父母は東京に出て来て四半世紀になるのに、それぞれの郷里のなまりを持っていた。わたしは今でもよく、おくにはどちらですかと人に訊かれる。

わたしが、毎日、こんなことを考えているのは、もうひとつには山の手育ちの片山廣子という人の本当の姿を、知りたいからでもあった。わたしがかの女に逢ったのは昭和十年代半ばで、それから昭和三十二年、七十九歳で亡くなるまで時折、出会ったに過ぎないばかりか、永訣の日からすでに三十年以上になる。それなのになぜこうも鮮やかにその面影が目にしたつのか。

口数少く、なかば眼を閉じて、静かにものをいうひとであった。わたしはおもに短歌の会の末席にいて、かの女の批評をきいたが、包容力のある評だった。わたしたちの会の世話役であった栗原潔子さんが、片山夫人に傾倒して、その最後の病床に、実母の面倒をみるように介抱されたのも、長いつきあいのあと、この晩年の歌会の賓客としての恩誼に報いたかったからである。片山夫人は、大正末期から昭和の初めにかけて短歌から暫く遠ざかっていた。

遠ざかっていた理由を、アイルランド文学に没頭したこと、芥川龍之介との恋愛のためという人がいる。芥川龍之介の「越びと」と題した一連の抒情的な旋頭歌は、明らかに片山廣子に寄せたものである。彼自身、

「彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、『越し人』等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍った、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだつた。

風に舞ひたるすげ笠の

何かは道に落ちざらん

わが名はいかで惜しむべき

惜しむは君が名のみとよ」

（『或阿呆の一生』三十七）

などと、記している。

何分にも、廣子は明治十一年生れで、芥川より十四歳年上である。廣子は松村みね子のペンネームでアイルランド文学の翻譯を發表していて令名があった。英文学専攻の芥川にとっては魅力ある女性であつたらうが、廣子の長男はすでに一高をへて東大法学部の学生であつた。大正九年には、日本銀行理事であつた夫に先立たれ、大森新井宿の木立に囲まれた住居に、やがて宗瑛のペンネームで才筆をふるう愛娘總子よきとの三人家族であつた。

この宗瑛に心ひかれて、堀辰雄が『聖家族』『菜穂子』等の小説を書いたことは、衆知のことである。その中で堀辰雄は下町育ちらしい感覚で廣子の芥川への想いを山の手夫人ふう仕立てている。しかし、国文学者の吉田精一はその晩年に、新しく発見されたかの

女の芥川への手紙から、積極的に交際を求めたのはかの女だと主張している。どちらにしても、芥川からの手紙は失われていて、廣子の返信のみ少々、残っている今の時点で、性急に事は決めかねる。堀辰雄も芥川の死後、彼の書棚を整理しているとき、廣子の手紙を見付け、お互いに苦しむことによって生きていきましようというような言葉があったといっていたと、丸岡明に聞いたことがある。

何はともかく、芥川がかの女からの手紙が来るといそいそと読んで、熱心に返信をしたためたのは事実のようである。

龍之介の夫人、芥川文の『追想芥川龍之介』には、

「大正十三年夏、主人は軽井沢に滞在していて、片山廣子夫人ともお知り合いになったようです。主人の葬儀には片山夫人が参列して下さいました。喪服に黒衿の夫人は、主人が感じておりました『彼と才力の上にも格闘出来る女』という感じの方でした。『芥川と才力の上にも格闘出来る女、それは私です』と言っておられるようで、私は何かヒヤリとしたものを感じて、思わず廻りを見まわしました。こんなことを感じたのは、私一人だったのかしらと思ったからです」とある。

芥川夫人の心の揺らぎが感じられるひとこまである。片山廣子の追悼文に、五島美代子が、その印象を怖いという言葉で繰り返し書いているのや、栗原潔子が、

狎ることゆるさざる高さ常もちし君を肯へりいまのわかれに

と、詠んだのを思うと、遠い場にいたわたしたちが、やさしいとかあたたかいと感じたものの奥にはきびしいものがあつたのだつた。

女流作家の雑誌『火の鳥』の同人には、

「私は仕事のことになると、虎になるのですよ」と、白く美しい歯なみを見せて笑いながらいったとのことである。

迷信じみたことをいうと、かの女は与謝野晶子と同年の五黄の寅年生れであつた。それはともかく、わたしは、やさしくあたたかいと感じたかの女の印象を掘り下げて、そのきびしさをつきつめなくてはならない。それにつけても人の噂さは頼りない。ある大学教授は、まじめな顔で、

「松村みね子さんのアイルランド文学は、ほんものですよ。上田敏も福原麟太郎もほめていますからね」といった。ここまでは本当だが、次がいけなかった。

「何でもご主人が外交官で、現地へ行つて、勉強されたんですつてね」

かの女は一度も海外へ行つたことはない。東洋英和女学校を卒業し、竹柏園の佐佐木信綱のもとで、短歌と古典の勉強をし、数え年二十二歳のとき、当時、大蔵省に勤めていた片山貞次郎と結婚した。

外交官はかの女の夫ではなくて父である。吉田二郎といって埼玉県大里郡の出で、早くから長崎へ出て、英語を学び、のちに、イギリスの総領事を勤めたりした。かの女が生れ

たのは麻布三河台の家で、十八歳のとき、永田町へ移るまでここで育った。三河台は、六本木の防衛庁側の一角で、ここから鳥居坂上の東洋英和女学校までは歩いて十分ぐらいなのに、かの女は寄宿舎生活をした。今日の学校と違って、日常的しつかけを重んじる当時の女学校の気風に従ったのであろう。わたしの母も同じ頃、岡山の高梁から出て来て、大阪の梅花女学校に学んだが、その寄宿舎には、朝日新聞社長の村山龍平の姪で養女であった人もいた。勿論、自宅は歩いて通える所にあったのだが、寄宿舎の様子があまり楽しそうなので、龍平夫妻をねだり落したのであった。生徒の数も少なかったから、同窓生の仲のよいことは、肉親以上で、死ぬまでしじゅう往き来していた。

片山廣子、当時の吉田廣子と新見かよ子も、そういう親しい友で、明治二十九年、竹柏園に入門したのも一緒だった。当時、竹柏園は神田小川町にあった。園主、佐佐木信綱は、ふたりが入門した日の思い出を、次のように記している。

「……二人が来られたので、玄関近く、狭い庭に面した書齋にとほした。東洋英和女学校の卒業生で、かよ子さんは卒業後一年余を米国にいつて学んだ、廣子さんは家で物語の類をひたすらよんでをつたが、歌を詠みたくなつたので、親しい同志がうちつれ入門に来たとのことであつた。自分は、庭を指ざして、ささやかな庭であるが、四季折々に草花がさいてをる。又あの柿の木は美しい実がむすび味はひもよい。今日は大掃除のあととて、いつも本のちらばつてゐるこの部屋も清浄である。歌は清い心から生れる。うつくしい花が

さいてよい実を結ぶやうに培はねばならぬといふやうな話をしたことが胸に残つてをる」
このとき、佐佐木信綱は満で二十四歳である。廣子は六歳年下で満十八歳であつた。

新見かよ子は望月小太郎と結婚したが未亡人となり、歌のほうは遠ざかつたらしく、昭和十四年に、信綱が片山廣子を軽井沢の別荘に訪れたとき、久しぶりに出逢つたと記している。かの女の娘は、竹柏園の歌人で、廣子と母との交友の様子を次のように書いている。「軽井沢の家のヴェランダに懸つてゐる木彫の額の歌を見るたびに、私の心をよぎるものは亡き片山廣子夫人のことである。殊に縁に囲まれた私の家の庭からかいま見える片山さんの山荘は荒れて庭には草が生ひしげり、名もない秋の花がもう咲いてゐる。懐かしさにひかれて主のゐない家の前に佇むと、帯を背中の真中より少し横に結んで、一寸、腰を出して歩かれる歩きつきや、私が女学生の頃から、レオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザに額や眼のあたりがそっくりだと思つて見てゐたあのなつかしい面わがありありと浮んで来る。

また在りし日の様に、——義子さん、お母様はいらつしやる——とお訪ねになるやうな気もして来る。黒つぽい紫色の着物——丁度、晴れた日の午後の浅間山の色だなと私は思つて見てゐた——をよく召して、太いこれも同系色の鼻緒の下駄を素足にひっかけて、気軽によく立寄られた。

私は私で、朝となく午となく、夜となく、毎日風のやうに舞ひ込んで御本をお借りし

たり、何となくこの佳き人のかたはらにゐたかつた。遠慮と云ふ事を知らぬ若い娘だつた私は、読書して居られる夫人のそばで自分も読書して、お午になると——では又——とすぐ前の我が家に帰つて来た。そんな娘の私を心の中でどう思つていらしたのか。いつも温かく歓迎され、御本も親切に選んで下さつて——この本は總しも面白いと云つてゐました——などと説明して下さつたりした。

今でもはつきりと目に浮ぶ。石造りの暖炉のわきが本棚で、探偵小説もずらりと並んでゐた。アガサ・クリステイの名を初めて知つたのも此処で、クリステイのものは愛読され、ぎつしりと集めて居られた。

夫人は私の母と東洋英和の小学校からの同級生で、寄宿舎では卒業まで同室であり、お互ひの結婚後は夏の軽井沢で交遊をつづけ、生涯、折々のブランクはあつたが、お互ひに文通をして消息をたしかめ合ひ、最後まで幼友達としての交りをつづけてゐた。私はその寄宿舎時代の話を母からいろいろ訊いては深い興味を持つた。

女学生の頃より御自分のペースを持たれ、何か超然としたところが見受けられたと云つてゐる。或る夏休みに西遊記を読まれてから、毎晩、消燈後、夜具を頭よりかぶつて一ヶ月位にわたり、ひそひそと実に面白くお話しをして下さつた事など、何度もきかされた。又、夫人の晩年に至るまで持たれた身辺の美しさは年輪と共に出来上つたもので、お嬢さま時代には、所謂、通俗的な美人型ではいらつしやらなかつたとも話してくれた。